

こんにちは、もしくは、はじめまして。
「松本屋本舗」まつもとめいこです。
本来なら「Prism」でお会いしたかったのですが、
諸般の事情で？ 2003 春の発行を断念してしまいました。
ので、今回は「Prism」最初の一編を
先行リリリースさせていただきます。

本当なら、こんな一部だけを先に出すってのは
かなり反則行為なんですけど、
どうしても、この時期に、ここだけは出したかったのです。

この春、この世界で起こったこと。
今までも人間の歴史で何度も繰り返されてきたこと。
今でも、この世界のどこかで続いていること。

平和ボケと言われてもいい。
臆病者と言われてもいい。

「それは間違っている」

と、

やっぱりわたしは言いたいのです。

2003 spring
松本屋本舗
まつもとめいこ

Scatola del Pandora

The Vision of ESCAFLOWNE
[Prism] pre-issue

2003 spring

箱の底に たったひとつ
残されたものは 希望

人の子に たったひとつ
許され そして 課されたもの。

窓から見下ろした町は、また町というよりは焦土と言ったほうがふさわしいほどに、あまりにも傷を負いすぎていた。

焼けた柱、崩れ落ちた屋根。路地には黒く炭化した梁や割れた壺などが転がったままになっていて、ところも多い。間もなく暮れんとする日に照らされたそれらは、黒々とした影を長く深く落としていた。

突然の見えない敵の襲撃と国中を焼き尽くした炎を逃れ、散り散りになっていった人々がようやく国に戻り始め、少しずつ、復興に向けて動き始めた。悲しくつらい日々を経て、今は多くの人々が明日を信じて毎日精を出している。その歩みは確かに小さいけれど、でも確実に一歩ずつ、新しい平和な生活に向けて進み始めている。

…頭では、そうわかっているのだが。

バアンは、眼下に広がる焼け跡を見やり、大きくため息をついた。

人々といっしょに国中を走り回る日々の中では、その小さな一歩を肌で実感できる。まだまだ苦しいことが多いのも確かだが、前へ、前へと進もうとする力が人々の心に芽生えていることを感じられる。王として、これほどうれしいことはない。

しかし、ひとたび全体を見渡してみれば、その一歩のなんと小さいことが。焦土と化したこの国がかつての平穏とささやかな繁栄を取り戻すには、まだまだ気の遠くなるような時間がかかることは誰の目にも明らかだった。

それは、誰にもどうしようのないこと。

あせってはいけない。

誰もがそう思っている。

バアン自身も、そう思う。

そう、考えようとしている。

しかし、どうしようもなく自分を襲う無力感と自責の念は、どんなに振り払おうとしても、まるで長く伸びた影法師のよつにバアンの心から離れることがなかった。俺がもっと強ければ…この国を守ることができていたら。

こんなにも多くの人を悲しませることはなかったかもしれないのに。

過ぎ去ってしまったことに対して、「もしも」の話をしても詮無いことを、頭は理解していても、自分の中のごとくで受け入れられないまま、ただ日々は過ぎていく。

でも、今は、それでいいんだ。

今はただ、人々の落ち着いた生活を取り戻すために、目の前に積み上げられた課題をひとつずつ乗り越えていくよりない。それ以外のことを考えるのは、すべてが一段落ついてからだ。余計なことを考える暇など、ありはしない。

…だから、休息の時間など不要なのに。

ただ一心不乱に体を動かしている間は、こうして自分の中の影法師にとらわれることもないのだから。

少しずつ傾きを増す夕日を選けるように立ち上がり、バアンは頭の中に入り込ん

だ影を振り払うかのように二、三度首を振った。

その視界の片隅、夕日の届かない部屋の片隅に、何か動いたのが見えた。バアンは一瞬身を固くし、それから、ゆっくりとその方向へ体を向けた。

彼がこの自室に戻ってから、この部屋に入ってきた者はいない。城とはいっもの、まだ仮普請であるため、扉や床はちよつと動くだけでもぎしぎしと音を立てる。だから、誰か他のものが部屋に入るようなことがあれば、必ず何かしらの音がするはずだった。そして、自分はそんな音を聞いていない。

「…メルルか？」

猫人である彼女なら、前もって部屋に潜んでいて音を立てずにいることぐらいできるかもしれない。しかし、ほんの幼い頃から今にいたるまで、彼女が主人であるバアンの部屋に断りもなく入ってきたことは一度としてなかった。影に向かって呼びかけながらも、その名前の主がそこにいないことは、バアン自身よくわかつていた。

部屋の片隅に沈んだ影に潜む気配はいよいよ濃くなり、そこに「何か」がいるのは明らかだった。

しかも、一人ではない。濃密な、明らかにこちらに対して視線を向けている複数
の気。

いったん落ち始めた夕日はあつという間に地平に引き摺り下るされ、窓から差し込んでいた夕日が消えてしまうと、部屋の中はすっかり暗くなってしまった。二つの月が昇ってくるまでにはまだ間がある。そして、珍しく部屋で休んでいるバアンを氣遣ってか、まだ誰も部屋にとまず灯りを持ってきていなかったで、今は部屋の中を照らす光は何一つない。

ひとときの闇。

その闇を、いくつもの濃密な気配がうごめいていた。

何も言わず、ただ、だまってバアンを見つめている。

その気配をびりびりと感じながらも、バアンは動くことも出来ずにその闇を凝視していた。

何がいる。何人いる。何のためにいる。

俺に、何を求めている。

バアンの背中を冷たい汗が伝う。いつのまにか、得体の知れない気配はバアンを四方から囲い込み、その距離を少しずつ、しかし確実に詰めてきていた。

全身が総毛だつ。何も見えない闇の中、肌で感じる気だけがすべてだった。

邪でなく。しかし、聖でもなく。

ただ、バアンに何かを訴えようとする。

「…俺に、何が言いたい。何を求めている」

無言のままただうごめく闇に対し、短く言葉を投げる。

そのときふいに、バアンの傍らを何者かが風のように通り抜けた。
そのとき、ほんの一瞬、バアンの耳に小さくささやいていった。

「なぜ？」

そう言ったその顔が闇の中かすかに見えた。

その顔は、バアンの見知った顔ではなかった。が、額から流した血がバアンにとつてどういう人物であるかを如実に物語っていた。

かつて、戦の中で、バアンの手にかかった者。

あるいは、バアンが直接手をかけたのではないにしろ、あの戦に巻き込まれ、命を落とされた者。

バアンの背中の汗が凍りついたかのように冷えた。

それを皮切りに、次から次へさまさまな人々がバアンの耳元にささやきを残していく。

「なぜ？」

「なぜ？」

「なぜ？」

なぜ、自分は死ななくてはいけなかったの？

なぜ、自分は殺されなくてはいけなかったの？

なぜ、あなたは生きているの？

その問いに答えることも反論することもできないまま、バアンは立ち尽くすしかなかった。

なぜ、自分はこうして生きている？ こうしてたくさんの命が消えてしまったのに、まだ、いろいろな未来があったはずの命。自分が消してしまったのに。

なぜ、自分は、生きている？

闇の中から止め処もなく投げつけられる問いにバアン自身も取り込まれたかのよう、自分の内と外から「なぜ」の言葉でぐるぐる巻きにされたようだった。

そして実際、バアンの手足は多くの人々によってがちりと捕まえられていた。

「なにを……」

意識せぬ間に自由を奪われていたことに気づき、喉の奥からわきあがりそうになる叫び声を無理やりねじ込んで何も見えない闇を見据える。

その漆黒の空間に、一瞬ふわりと光が見えた。 紅い光。 バアンを手招きするように優しくやわらかく瞬く。

しかしその光はあつという間にうごめく闇に取り込まれ、見えなくなった。 それに代わり、青白い閃光がひらめいた。 あの花は…刃だ。

徐々に近づいてくる青白く冷たい光は、明らかに、バアンを標的にしていた。

このままでは、やられる。

バアンは渾身の力を振り絞って手足を押さえていた手を振りほどき、閃光が彼を袈裟懸けにせんとするその瞬間、ひらりと身をかわし、自分の剣を振りぬいた。見えない相手の喉元にその切っ先を突きつける。その切っ先を見つめ、バアンは自分の意識がぐちゃぐちゃになっていっているのを感じていた。

俺は、戦いたくない。もう、誰も傷つけたくない。でも…死にたくない。

それだからと言って、俺はまた、剣を抜いてしまっただけよかったですか。

やらなければやられる。それしか、選択肢がなかった。

あのときも…今も。

仕方なかったんだ。自分が生き延びるためには、それしかなかったんだ。

許してくれなんて言わない。言えない。

ただ、それしかなかったんだ。

やらなければ、おまえが今いるその闇の中にいたのは俺の方だったんだ。

…そう思うのは、生き残った者の傲慢でしかないのだろうか。

そして、自分が生き残るそのために、俺はまたこっぴどく剣を抜くのだろうか。

これからも。

そのために、誰かの命を奪うのだろうか。

もう誰も、傷つけたくないのに。

突きつけた剣の切っ先の向こうで、闇の中、影は身じろぎもしなかった。

どれだけの長い間、そうしていただろうか。

ふと、見つめた切っ先の向こうで、いつか一瞬見えたあの紅い光が小さくふわりと光った。

やわらかく、あたたかく、優しい光。

そのとたん、バアンの周りを息苦しくなるほどに囲んでいた影の気配がさあっと引いた。それと同時に、この世の果てまで続いているかに思えた闇が徐々に薄れていく。その向こうに浮かび上がる部屋は深く紅い夕日に照らされて、実は窓から街を見下ろしていたときからさほど時間がたっていなかったことをバアンは知った。

しかしそんなことよりも、剣の切っ先にいた人影に、バアンはその正気を失いかけた。

切っ先のわずか先には白い喉元。そこからわずかに視線を下にずらすと、あの闇の中でふわりと光った紅い光がバアンの目を射抜いた。

その光の持ち主を、バアンはよく知っている。

ゆっくりと、視線を上に移す。その先にあるものを早く見たいような、怖くて見

られないような。

青白く光る切っ先の向こうで白い喉元がごくりと息を呑んだ。そのさらに上には、その切っ先を見つめ、震えるふたつの光があった。

いつもなら、バアンを何よりやわらかい気持ちにさせる暖かな光をたたえたその瞳は、今はただ恐怖と驚愕の色に満たされていた。

沈む寸前の夕日に照らされて赤黒く染まった床に、ひとみはほとんど倒れこんだ姿勢のまま、その視線を切っ先から離せずにいた。

その彼女の瞳が、やがてゆっくりと上に向けられる。その喉元に突きつけられた剣の持ち主の腕、そして、顔へ。

ひとみの視線が、バアンをつかまえた。

自分の見たものを、自分のしていることを認めたくなかったからか、バアンの意識はしばし空白の世界をさまよっていたが、ひとみの、おびえつつもその奥に確かな決意を秘めたその瞳の光が、バアンを、正気の世界へ呼び戻す。

ひとみを：俺が、傷つけようとしていたのか。

ひとみを。

自分の突きつけた剣の先にいるのは、まぎれもなく、彼が誰よりも守りたいと願っているはずの少女だ。その彼女をおのれの手にかげんとしていた、その事実がバアンの心をつてないほどに大きく揺さぶった。しかし、それに反して体のほうはまるで凍りついたように動かなかった。動かすことができなかった。早く、この剣を下げなくてはいけないのに。ひとみを安心させたいのに。彼女に深く詫びたいのに。

まるでおとぎ話の呪いにかげられたように、体が言うことをきかなかった。

その呪縛を解いたのは、ひとみの声だった。

「バアン…あたしがわかる？」

小さく、かすれた声。

しかし、その響きは、決してバアンを責めるでもなく、恐れるでもなく、ただ、バアンを氣遣う優しさだけだった。そのことにバアンは驚愕する。

なぜ責めないのか。自分の命が奪われんとしていたのに。

他の何とも比しようのないその恐怖を、バアンはよく知っている。その恐怖を味わってなお、なぜこうして、バアンに優しさを差し伸べられるのか。そして、その優しさに自分は己を委ねてしまっただけなのだろうか。

止め処のない疑問がバアンの心に渦巻くが、しかしその一方で、差し出されたひとみの優しさ：無条件の愛情が、バアンの体を縛り付けていた見えない糸を少しずつ切り離していくのも確かだった。

ひとみの優しい声に導かれ、バアンは少しずつ体を動かす術を思い出していた。息をする。ゆっくりと身を起こす。腕を下ろす。

そして、壁際にある椅子にかけようと一歩下がったところで、その手に握り締めていた剣が椅子の脚にぶつかり、がしゅんと派手な音をたてた。その音は、まるでバアンに、どんなにひとみが温かい声をかけてくれたとしても、自分が彼女に剣を向けたことを忘れるな、おまえはその手に剣を持つ者なのだ、と激しく警告を与えているようで、バアンはその剣を持っていることすら恐ろしくなり、思わず手を離してしまった。

剣は床に転がり、さらに大きな音をたてる。

「バアン！ 大丈夫？」

「来るな！」

立ち上がってバアンのそばに寄ろうとしたひとみを、バアンは声で制した。

今ひとみがそばにいたら、自分は差し出されたその愛情に自分のすべてを委ねてしまっただろう。自分のしたこと、自分が責を負うべきことをすべて放り出して、まるで小さな子どものように泣いてすがってしまっただろう。

それはきつと、今の自分には許されていないことだ。

「バアン……」

まるで床に見えない線でも引かれていて、そこから先に入ってはいけないとでも言われたように、ひとみはバアンまで手の届きそうに届かない中途半端な位置で、立とうとして身を起こしたままの姿勢でバアンを見上げていた。

そのひとみを見ることもできず、バアンは倒れこむように椅子に腰掛け、顔を覆った。

「……済まない。おまえを斬るつもりなどなかった」

誰よりも大事にしたい、守りたい人を、傷つけようとした自分。

己の中に巣食う闇の深さを思い、恐ろしさに体ががたがたと震える。

戦いの業は自分が負うと心を決めた。そうして、戦を乗り越えてきた。

しかし、戦が終わった今も尚、その業は自らの中にとどまったまま、こうしてその鎌首をもたげる機をうかがっている。

バアンはそのことが恐ろしくてたまらなかった。

今回は無事だった。でも、次は？ 今度また同じように剣に手をかけることがあつたら、そのときは今度こそ取り返しのつかないことになるかもしれないではないか。戦が終わりに、平和な国をふたたび築くために多くの人々が前向きな気持ちで働いている今、こんな奥底の知れない闇を抱えた自分が王として立っていいのだからうか？

多くの人々を屠ってきた自分が？

いつしか、ひとみがバアンのすぐそばに立っていた。彼女が近づいてくるのを、彼は気づいていないわけではなかった。とどめないといけない、そばに寄ってはいけない、そう思いながらも、とどめるために体を動かすことはできなかった。顔を

覆ったまま、そつと近づいてくるやわらかな、でも困惑した顔をしているのが見えるような、その気配を肌で感じていた。

そのぬくもりに身を委ねてしまうことを、人は許すだろうか？

多くの犠牲の上に、今、ここにいる自分を、

では、なぜ自分はここにいる？

確かに、やらねばならぬことは山ほどある。

王として、国を再興しなくてはいけない。

傷ついた人々をいたわってやらねばならない。

それから、それから……

自分がやらねばならない多くのことを数え上げて、しかしそれは所詮言い訳に過ぎないのだろうか、と思つたそのとき、バアンは自分の頭がひとみの胸にきつく抱きかかえられたのを感じた。その苦しいほどのぬくもりが、バアンの中でぐるぐる渦を巻いていたたたくさんの理由を粉雪のように溶かした。

生きたい。

そのたつたひとつの言葉が、温かな紅い光をまとつて心に舞い降りる。

生まれてきたからには、死にたくなかない。そこに何の理由もない。

生まれてきたのは、生きるためだ。

いとしい人とともに生きるためだ。

ただ、それだけだ。

なのに、「戦」という狂気が、人をおかしくする。

やらなければやられる。

傷つけ、傷つけられ、恐れ、恨み、そして傷つける。

悪夢の連鎖。

あたたかなひとみの腕の中で、バアンは声を出さずに泣いた。

こらえてもこらえても、涙はあとから溢れ出す。

すべてを戦のせいにして自分の罪を忘れてはいけない。許されるものではない。

でも、自分は今、生きている。

そしてこの世には、たくさんの人が同じように生きている。

生きていること、人のあたたかなぬくもりに包まれることを、きつとこの世の誰も、それは間違っているなんて言っではいけない。

人は、そのために生まれてくるのだから。

ならば、自分たちがこれから生きていけるように、そして、これから生まれて

くるたくさんの命が希望を抱いて生きていけるように、この世界を動かしていくのが生きている人間のつとめのはずだ。

戦いの業を背負い、悲しみの鎖を断ち切ることを己に課した自分は、確かに心の奥底に暗い闇を抱えているけれど、それでもきつと、それだからこそ、できることがあるはずだ。

いま、生きているのだから。

この闇を、これ以上多くの人々の心に棲まわせないために。

とめどなくあふれる涙の中で、バアンは自分の心の闇の中に、小さいけれど確かな、紅くやわらかな光がともったのをはつきりと見た。

どれほどの時間がたっただろうか。

いつしか天高く昇った二つの月が、赤黒く染まっていた部屋を水で洗い流したかのように青く澄んだ光で満たしていた。いつ果てるもしれなかった涙も、今は目にじりにかすかに残るのみだった。

ようやく心が落ち着いてきたバアンは、今更のようにその涙が気恥ずかしく、そつとひとみの腕をとくと、彼女に顔を見せないよう、部屋の中と同じく青い静寂に満たされた町を見やった。

「…エスカフローネを封印しようと思う」

バアンが小さく、しかし、確固たる意思を込めて言ったその言葉に、ひとみが少し意外そうな顔をした。背後のその気配に、バアンは振り向くことなく小さく微笑んだ。

これでいいんだ。

エスカフローネは戦いの神。本当ならば、永遠に眠りについていべき存在なのだから。

それが、鎖を断ち切るために今の自分ができる、最初のひとつだ。

エスカフローネを眠らせ、そして、二度と目覚めさせずにすむよう、やらなければならぬことは、まだまだ山ほどあるし、どれだけの時間がかかるものか、自分の生きているうちにけりがつけられるものなのかどうすら、まるで見当もつかないけれど。

天高く輝く二つの月を見上げ、バアンはやらなくてはいけないことをひとつひとつ心の中で数え上げていたが、その青い光が、今まで心の闇のさらに奥底にしまいこんで見えないようにしていたひとつの約束を突き刺すように照らし出していることに、もはや気づかないわけにはいかなかった。

戦いが終わったら…ひとみを、幻の月に帰してやる。

彼女と最初に、そしてたったひとつだけした約束を、果たさなくてはいけない。本当は、一刻も早く帰してやらなければならぬ。頭ではそうわかっているが、せつかく一度は帰ったものを、自分の望みに負けてガイアに連れ帰ってしまい、あげく、そのことを思い出さないようにしていた自分の弱さが恨めしかった。だが、ひとみのいない世界も、今のバアンにはもう考えられないこともまた、紛れもない事実だった。

いとしい人と生きる。

ひとみとともに生きる。

それが、今のバアンの望みだった。

しかし、ひとみをふるさとに帰さなくてはいけない。なぜなら、それが約束なのだから。

そして、家族を失うつらさを、バアン自身もよく知っているのだから。

バアンひとりのわがままでひとみをガイアに留めるわけにはいかないのだ。

どんなにいとしい人だとしても。誰よりもそばにいたい人だとしても。

「もうひとつ、やらなければならぬことが、ある」

窓枠をぎゅっと握り締め、月を見上げたままバアンは言った。言葉にしないと、その約束をまた自分の弱さがどこかへしまいこんでしまいそうだったから。

しかし、何を、とはつきり言えなかったのは、言葉にってしまうことで、その約束の成就を明らかにしてしまうことを恐れているためであることに、バアン自身も気づいていた。

ひどく、中途半端な言葉。

帰してやりたい。

帰したくない。

それが、ひとみの心をひどく苦しめることも、バアンにはちゃんとわかっているのに。

ひとみは、返事をしない。

バアンも、それ以上何も言わない。

ただ青い月の光が、行き場を失い同じ場所をぐるぐる巡るそれぞれの想いを涼やかに照らし出していた。

きれいごとだと思ってた
「希望」ということばを
苦しいくらい抱きしめて
あなたを見上げている。

2003 spring 松本屋本舗
まつもとめいこ

戦争について考えた。
何がいけないんだろう、と考えた。
誰が悪いんだろう、と考えた。

もちろん、簡単に結論が出ることではないけれど、
人に武器を向けたその人よりも、
人が人に武器を向けることよりも、
武器を持つことしか選択肢がない、その状況自体が何より一番狂っていると
それだけは言える。

本当は、誰もそんなことをしなくていいはずだったのに。

机上の理想論でしかない、と言われればそれまでです。
でも、
武器を向けられる恐怖、
武器を持つ恐怖を、
想像するだけで涙が出そうなわたしは、
ただひたすらに

「NO WAR」

と祈ることしかできないのです。

Prism の原稿を書き始めたさなかに
そんなことを考えていたら、
どうしてもこの章しか書けませんでした。
って言い訳なんですけど。